

# TSUBOHORI

平成9年度(1997)  
姫路市埋蔵文化財調査略報



姫路市教育委員会



## はじめに

播磨のほぼ中央に位置し、播磨国風土記にもその記述が残る姫路の地は、陸海の交通の要所として古くから発展してきました。そのため、世界文化遺産に登録された国宝・姫路城をはじめ、播磨国分寺跡、壇場山古墳、瓢塚古墳など、重要な文化財にも恵まれています。

加えて、近年播磨の中核市として更なる発展をめざす本市では、開発に伴う発掘調査も増加の一途をたどり、新たな遺跡の発見が相次いでいます。そして、これら地下に眠っていた数々の文化財によって、姫路市の歴史風景は日々変化しつづけています。本書は、その内容を速やかに市民の皆様にお伝えする目的をもって刊行いたしました。

本来、発掘調査成果の全てを報告するためには、長期にわたる整理と研究の時間を要します。そのため本書の内容は決して十分とは言えませんが、より多くの身近な文化財の存在を知っていただくことにより、本市が行っております埋蔵文化財発掘調査事業に、一層の理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長

**高岡保宏**

## 例言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成9(1997)年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、すべて姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は、各調査担当者が行い、編集は小柴が担当した。
4. 各調査地の位置図は、国土地理院2万5千分1図を使用し、方位はすべて上が北である。
5. 本書の図面は国土座標(第V系)を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を使用した。
6. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)  
今里幾次、亀田修一、中井均、木戸雅寿  
下太田自治会、姫路市街路建設課
7. 遺物の整理および図版の作成には、岡本美香、小田賢、佐藤朋子、田口啓美、田中章子、中山美歩、名村いずみ、萩原寛子、藤戸翼、圓尾かさね、山田郁子の補助を得た。
8. 表紙の写真は、(仮称)別所区画整理事業地内遺跡第2地点9区を東から写した写真である。

## 発掘調査の動向

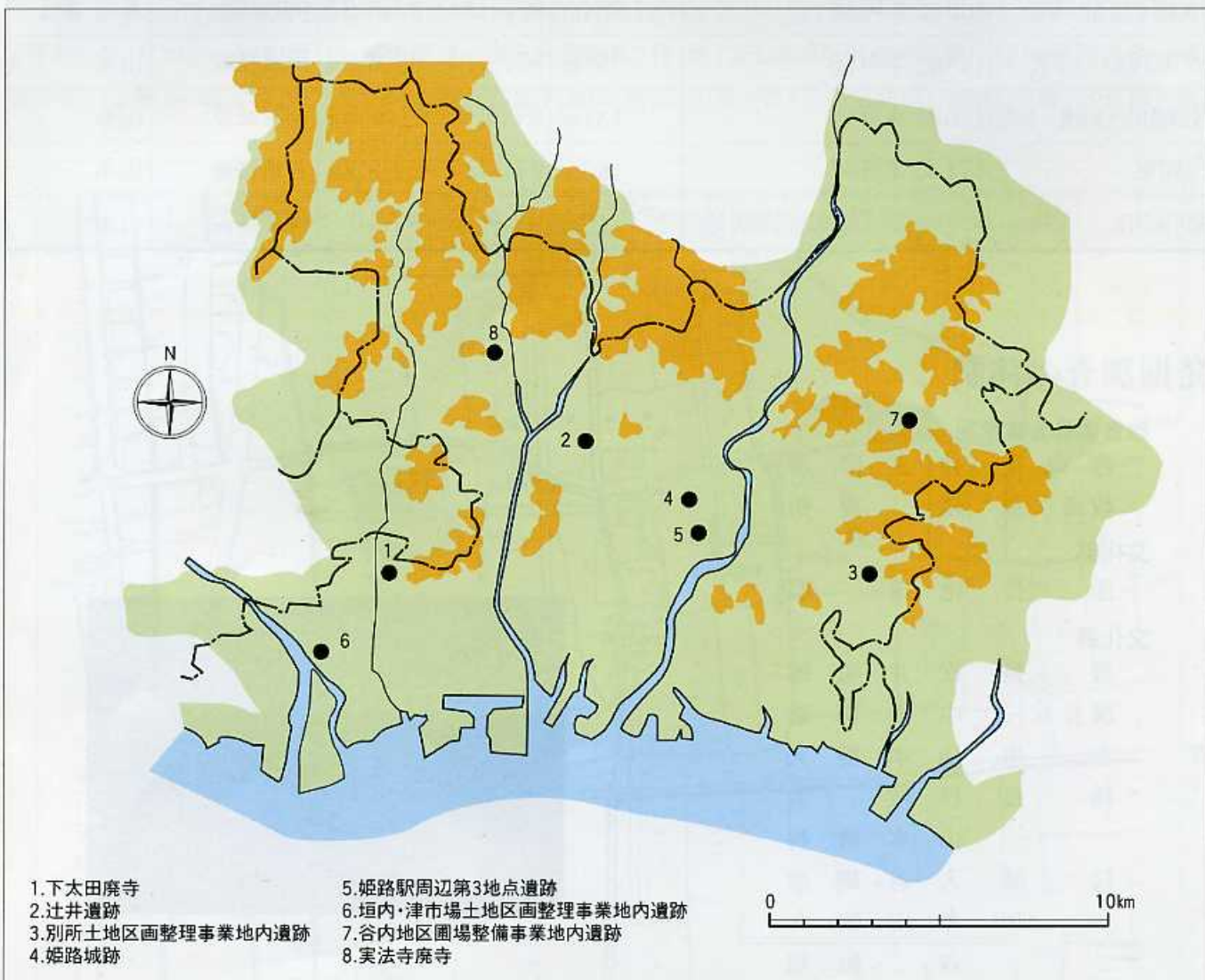
平成9年度は、13件の埋蔵文化財の発掘調査を行った。このうち、姫路城跡では5件が実施されている。三国堀の石垣修理に伴う調査では、池田氏時代の生活面などを確認した。またお城本町地区では、江戸時代の姫路藩校である「好古堂」の屋敷割り遺構が出土した他、本町遺跡関連とみられる奈良～平安時代の遺構もみついている。

土地区画整理事業に伴う調査は3件である。別所では奈良時代の掘立柱建物跡が多数検出された。姫路駅では市ノ郷遺跡関連とみられる弥生時代の掘立柱建物および、市ノ郷廃寺の瓦などがみついている。今年度、全面調査を開始した垣内・津市場では、15世紀中頃～16世紀初頭にかけての堀とその内側を区画する2条の柵列が出土した。

遺跡の確認調査は3件である。3年目にあたる下太田廃寺では、講堂基壇盛土および、寺域南西隅とみられる築地基壇状遺構を確認した。加えて、里道拡幅に伴う緊急調査では、寺域の北西限にあたる溝が出土し、その北側からも掘立柱建物跡などが検出された。また、昨年引き続き掘調査を行った谷内では、遺構がほとんどみつからない。実法寺廃寺では、明確な遺構は確認できなかったが、瓦や硯など寺跡の存在を示唆する遺物が多量に出土した。

その他、住宅建設に伴って辻井遺跡の調査を行い、弥生時代中期の竪穴住居跡や土坑、奈良時代の溝、掘立柱建物跡などを確認した。

発掘調査成果の現地説明会は、別所土地区画整理事業地内遺跡の第12次調査で、平成10年2月28日に実施した。



平成9年度 発掘調査地点の位置図

遺跡名	調査回数	所在地	調査面積	調査期間	調査原因	調査担当者
下太田廃寺	3次	勝原区下太田	230m <sup>2</sup>	97.10.30～98.2.7	道路新設(里道拡幅)	大谷
下太田廃寺	4次	勝原区下太田	260m <sup>2</sup>	98.2.16～98.3.31	遺跡確認調査	大谷
辻井遺跡	24次	辻井西藤ノ木	900m <sup>2</sup>	97.5.15～97.8.12	マンション建設	大谷・小柴
別所土地区画整理事業地内遺跡	12次	別所町別所	2,742m <sup>2</sup>	97.5.9～97.7.2 97.7.16～98.3.31	土地区画整理	小柴
姫路駅周辺第3地点遺跡	2次	市之郷町	5,230m <sup>2</sup>	97.4.1～98.3.15	土地区画整理	秋枝
垣内・津市場土地区画整理事業地内遺跡	1次	網干区垣内南町	1,100m <sup>2</sup>	97.12.24～98.2.28	土地区画整理	秋枝
谷内地区圃場整備事業地内遺跡	2次	飾東町北野・大釜・清住	1,106m <sup>2</sup>	98.1.10～98.2.28	圃場整備	秋枝
実法寺廃寺	1次	実法寺	156m <sup>2</sup>	97.12.9～97.12.20	個人住宅建設	秋枝
姫路城跡						
お城本町地区市街地再開発	168次	本町68	7,964m <sup>2</sup>	97.4.24～98.8.31	再開発ビル建設	多田・森
NTT洞道移設	1次	169次 本町68	57m <sup>2</sup>	97.5.14～97.5.24	洞道移設	山本
国立姫路病院更新整備	5次	170次 本町68	131m <sup>2</sup>	97.6.9～97.6.21	病院建替	山本
三国堀		171次 本町68	160m <sup>2</sup>	97.7.27～97.8.25	石垣修理	山本
NTT洞道移設	2次	172次 綿町・呉服町・東駅前町・駅前町地内	115m <sup>2</sup>	97.9.18～97.10.3	洞道移設	山本

## 発掘調査の体制

### 教育委員会事務局

教育長 井上 隆 溥

教育次長 森 茂 樹

### 文化部

部長 池田 宏

### 文化課

課長 松井 敏 郎

課長補佐 中山 智 雄

主事 柿本 英 夫

係長 秋枝 芳

技師 山本 博 利

技師 大谷 輝 彦

技師 多田 暢 久

技師 森 恒 裕

技師補 小柴 治 子



## 1. 下太田廃寺 (第3次・第4次調査)

1. 所在地 姫路市勝原区下太田字ツクワ
2. 調査面積 230㎡ (第3次)、260㎡ (第4次)
3. 調査期間 平成9年10月30日～平成10年2月7日  
平成10年2月16日～平成10年3月31日
4. 担当者 大谷



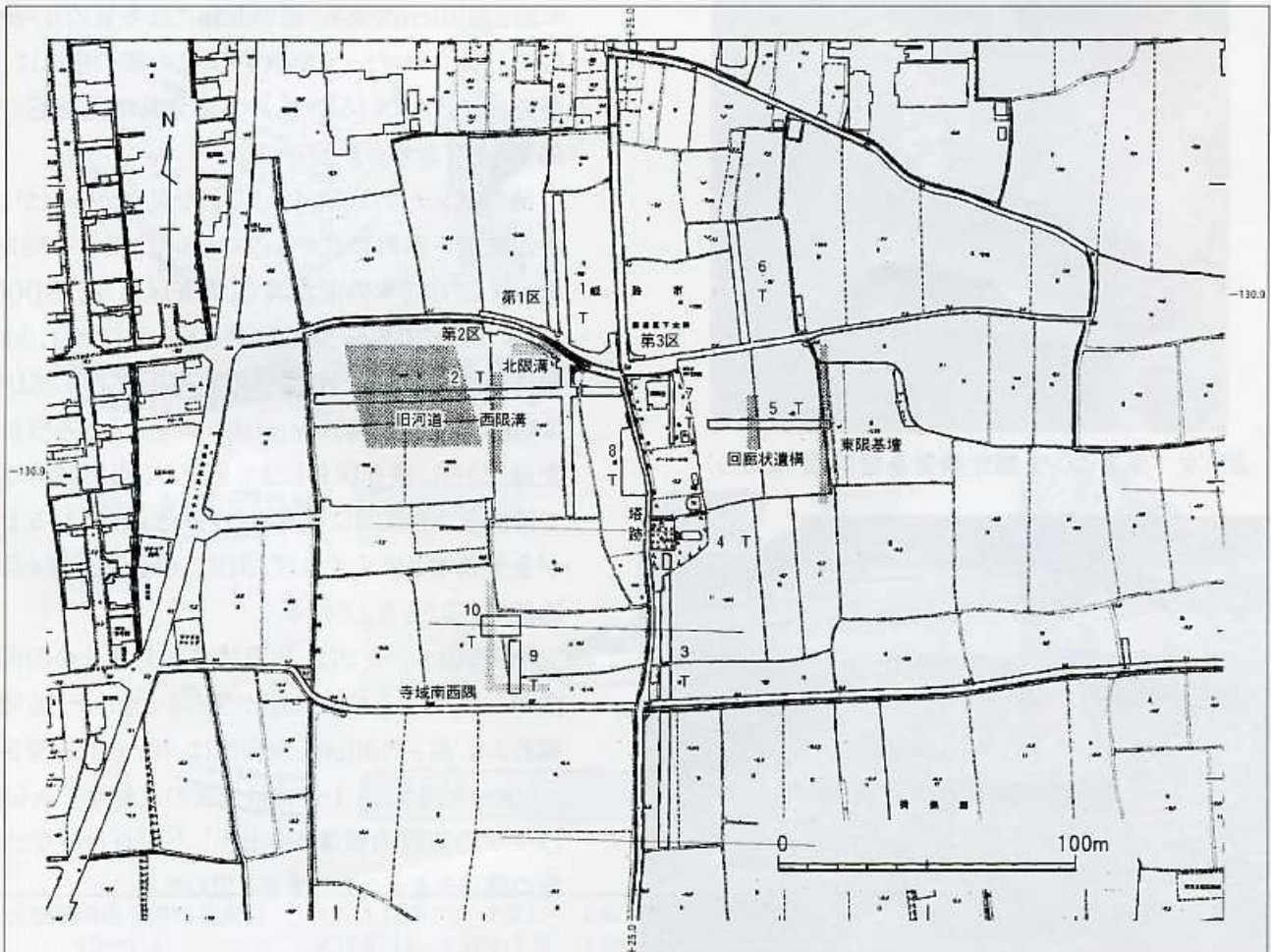
調査地の位置図(「網干」)

下太田廃寺は、白鳳時代創建と考えられてきた寺院である。昭和37(1962)年には、塔跡が県指定史跡となっている。平成7(1995)年から実態解明のための発掘調査が行われ、寺域西・南・東限を確認するなど多くの成果をあげた。

本年の調査は、寺域北部を東西に走る里道拡幅工事に伴う緊急調査(第3次)と寺域確認調査(第4次)である。

### 第3次調査

確認調査との混乱を避けるため、東西里道の北側を第1区、南側を第2区、第1区から南北里道を挟んで東側を第3区と呼称した。見つかった遺構には、廃寺関連の掘立柱建物跡2棟、溝1条と廃寺以前の竪穴住居跡(6世紀前半)1棟、廃寺後の土壙墓(鎌倉時代)などがある。掘立柱建物跡は、第2区中程～第1区の南北棟(建物1)と第2区東部～第3



下太田廃寺 トレンチ配置図 (S=1:2500)



第3次 東西方向の溝(北西から)



第4次 第7トレンチ想定講堂基壇前面(南から)



第4次 第9・10トレンチ全景(北から)

区西端の東西棟(建物2)の2棟がある。建物1は、大半が調査区外であるが、第1次第1トレンチの成果と併せると南北4間×東西2間となる。柱痕跡は径約30cm、掘方方形で一辺約1mである。建物2は北側が調査区外となるが、東西5間×南北2間と思われる。建物1に比べ柱穴掘方がやや小さい。溝は東西方向で、幅約6m、深さ約40cmである。第2区から第1区中程にかけて掘削され建物1の西側で終わる。第1次調査の西限溝は、その北側延長上にあたる。今回の調査区で見つからなかったことから、東に折れてこの溝に続くと思われる。

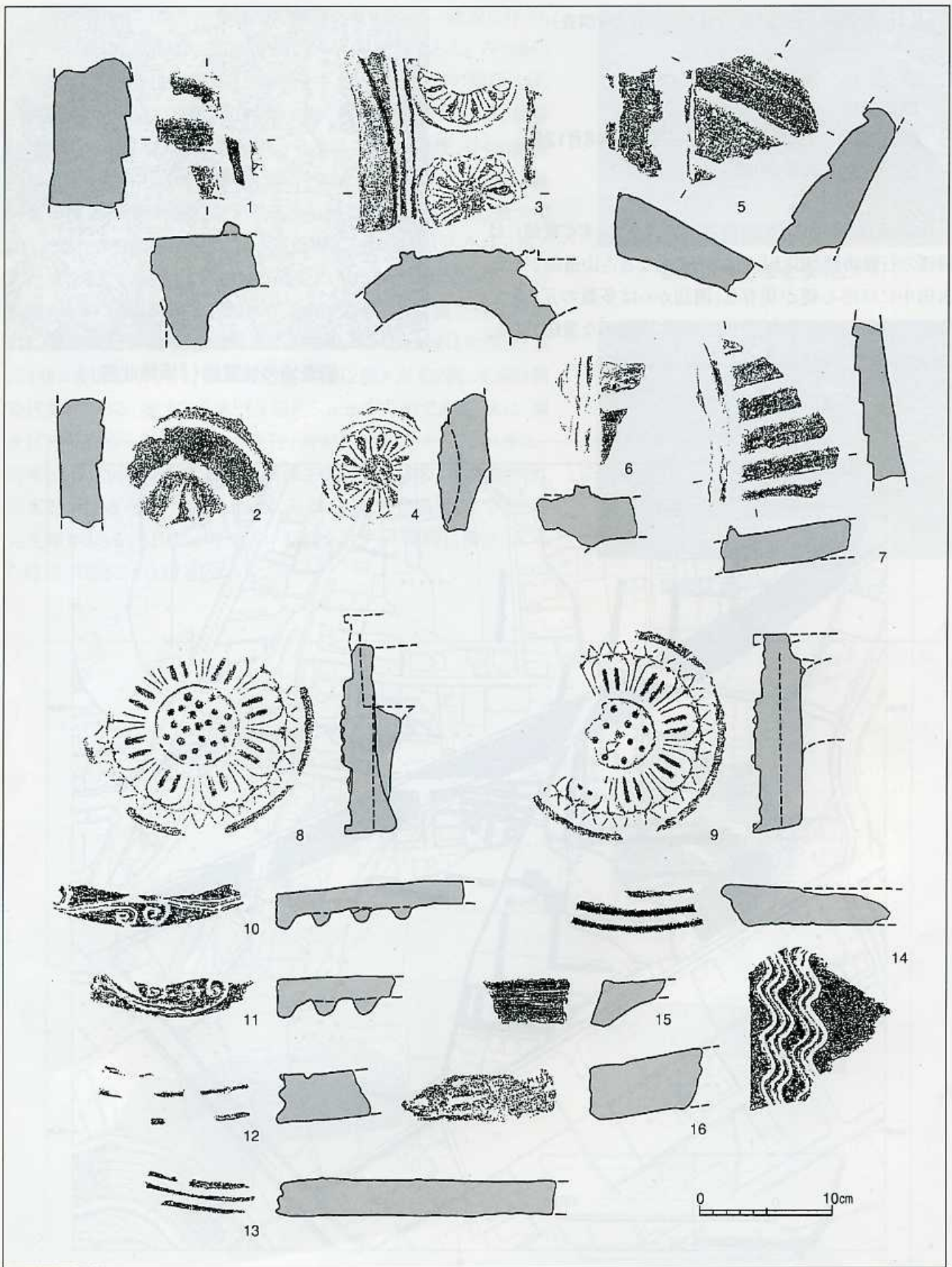
#### 第4次調査

第7(講堂南北端、金堂北端)、第8(金堂西端)第9・10(寺域南西隅)の計4本のトレンチによって各項の確認を目指した。

第7トレンチでは、調査区北端から約10mにわたって基壇盛土を確認した。1層の平均厚約5cmで、2～5層分一厚さ約20cmが残存していた。南半部では、東西方向の溝が見つかった。幅約5m、検出面からの深さ約90cmである。溝の北側には多量の瓦・礫が幅約1.5mにわたって集中する。この礫の中には、東西方向に並んでいるものもあり、講堂基壇化粧石の一部である可能性も考えられる。

第8トレンチでは、溝・ピットなどが見つかったが、大半が鎌倉～室町時代のものであった。廃寺の時期と思われるのは2本の南北溝で、調査区西端のSD06と東端のSD07である。SD06は長さ約6m、深さ約10cm、幅は西肩が調査区外となるため不明である。SD07は幅約80cm、深さ約10cm、南北約9m分がみつき、北側はさらに調査区外にまで延びる。明治18年頃まで第8トレンチ東側に残存していたと伝えられる土壇が金堂基壇と仮定すれば、SD07が金堂西端を限る施設であるとも考えられる。

第9・10トレンチでは、基壇状の高まりとその両側に溝がみつき、寺域南西隅が明らかとなった。基壇は幅約3m、高さ約30cm、両側溝は、幅2～3m、深さ40～60cmを測る。出土遺物は少量の瓦程度であるが、トレンチの基壇内側溝から出土した板材や柱などは、塀の構造を考える上で重要と思われる。



下太田廃寺出土遺物実測図  
(S=1:4)

1,5,11,12 第7レンチ盛土中 2,10 第7レンチ SK01 3,4,7 第2区 SX01 6 第1区 SP96 8 第1区SX01 下層  
9,14 第7レンチ SD01上層 13 第8レンチ SD06 15 第9レンチ 黄褐色包層 16 第9レンチ 灰色シルト

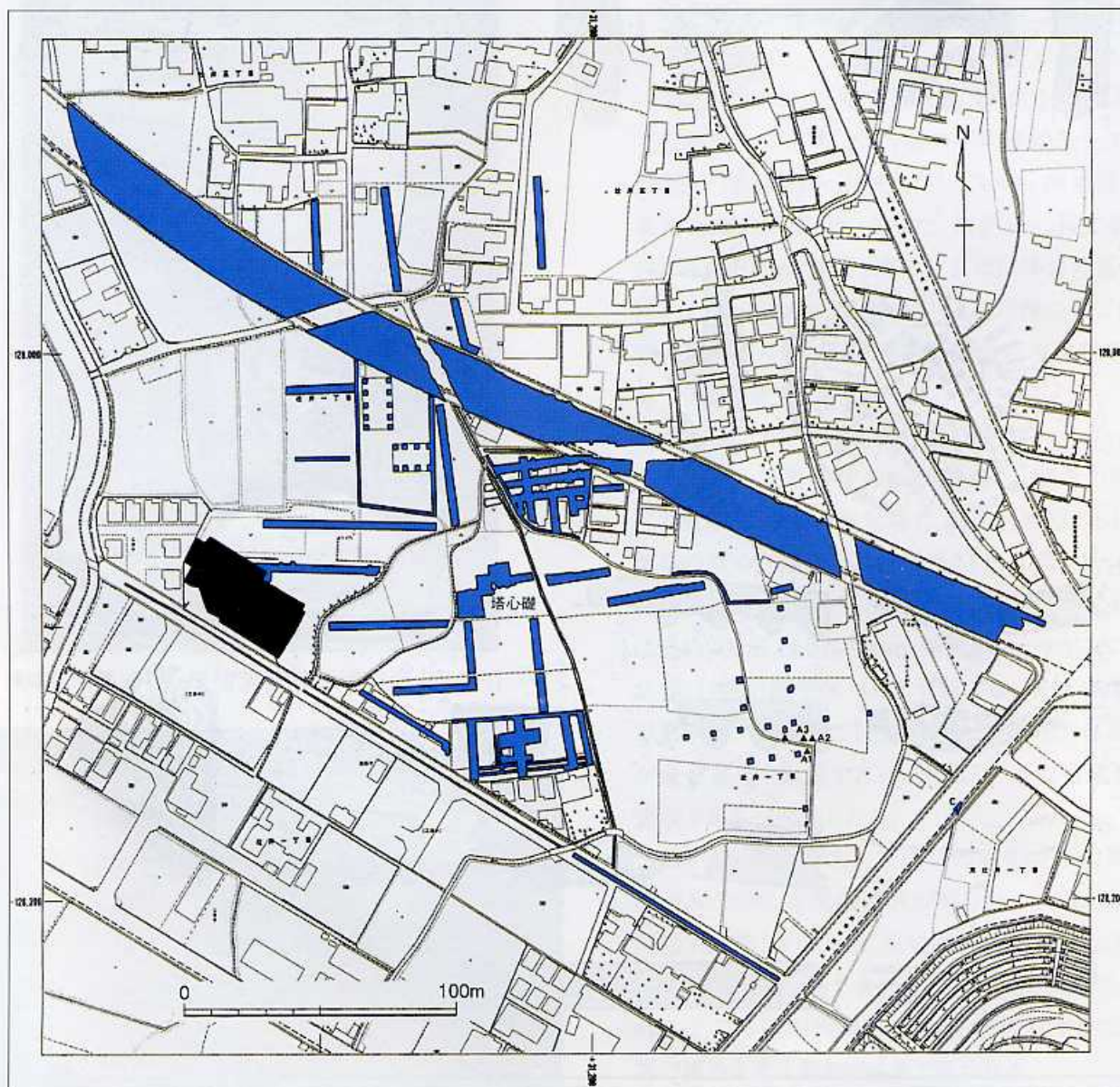
## 2. 辻井遺跡〔辻井廃寺〕 (第24次調査)

1. 所在地 姫路市辻井西藤ノ木
2. 調査面積 900㎡
3. 調査期間 平成9年5月15日～平成9年8月12日
4. 担当者 大谷、小柴

辻井遺跡・廃寺は、姫路市西郊に位置し、すぐ東側には銅鐸の石製鋳型が出土したことで著名な名古山遺跡がある。水田中には塔心礎が現存し、周辺からは多数の瓦、縄文・弥生土器等が出土することから、戦前より著名な遺跡である。これまで23次にわたる調査がなされている。



調査地の位置図(「姫路北部」)



辻井遺跡・辻井廃寺第24次調査発掘区(赤)と既往調査区(青) (S=1:2500)



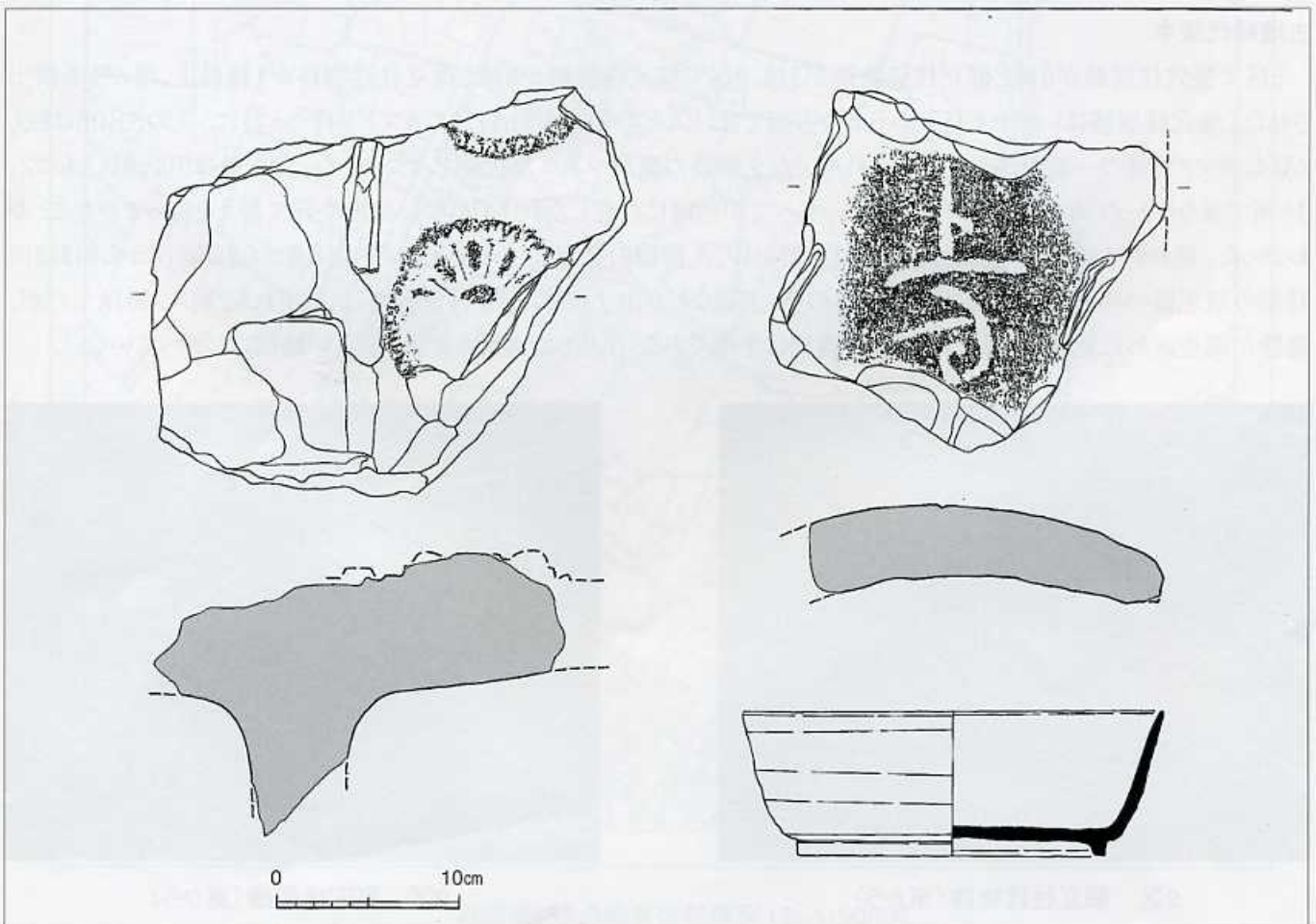
今回の調査は、遺跡南西部で計画されたマンション建設に伴うもので、その一部は既に昭和57(1982)年に調査済である。みつかった遺構は、弥生時代中期と奈良時代を中心とする。前者の時期には、中期後葉の竪穴住居跡2棟、中期前葉の土坑1基などがある。住居跡は2棟とも削平が著しく、検出面からの深さ10cm程度、径4m前後の不正円形プランとなるが本来は円形であったと思われる。土坑は長円形平面で、長辺約6m、短辺約2.5m、底部は船底状を呈し最大で深さ約60cmを測る。内部には、炭・灰層とこれらの混じらない土層とが互層をなして堆積し、各層には多量の土器が含まれている。土器焼成あるいは祭祀用かと思われる。後者の時期には、掘立柱建物跡2棟、溝2条などがある。建物は2棟が重複している。1棟は東西棟(東西4間×南北3間)、もう1棟は南北棟(東西2間×南北2間、北側は調査区外)である。掘方は2棟とも1辺約60cmの方形である。溝は、調査区の北西から南東に2条が並行(南がSD01、北がSD02)する。両者ともほぼ同じ規模で、幅約2m、深さ約50cmを測る。出土遺物は、須恵器(杯・蓋・甕等)、緑釉、土馬、瓦類(蓮華文帯鴟尾、文字瓦、軒丸瓦等)である。SD02がやや古い傾向を示すが、同時に機能していた時期があることは間違いない。



調査区東半部全景(西から)



調査区西半部全景(東から)



SD01出土遺物実測図 (S=1:4)

### 3. (仮称)

## 別所土地区画整理事業地内遺跡

第2地点確認調査・1区～9区、11区～13区(第12次調査)

- 1.所在地 姫路市別所町別所小山他
- 2.調査面積 2,742㎡(内確認調査72㎡)
- 3.調査期間 平成9年5月9日～平成9年7月2日  
平成9年7月16日～平成10年3月31日
- 4.担当者 小柴



調査地の位置図(「加古川」)

遺跡は、姫路市東部に所在する。土地区画整理事業に伴い平成2年度より確認調査を行った結果、2ヶ所で遺跡が見つかり発掘調査が実施されてきた。これまでの調査は、主に国道2号線の南側に位置する第1地点で行われ、平安時代後半から鎌倉時代の遺跡などが発見されている。

第12次にあたる今回は、国道の北側に位置する第2地点で、18ヶ所の確認調査と12ヶ所の全面調査を実施した。このうち確認調査では、坪10、11、14、16、23で奈良時代～中世にかけてのピットが見つかった。全面調査では第1区～第9区で古墳時代後半～鎌倉時代の遺構を検出し、第11区～第13区では、弥生時代中期～中世の遺物が出土した旧河道や溝が発見された。なお、第11区～第13区に接する市道は近世山陽道であると同時に、奈良時代に造られた官道「古代山陽道」の推定地とされている。しかし、今回はその痕跡をまったく確認できなかった。

それでは、以下時代別に詳細を述べていきたい。

#### 古墳時代後半

5区で竪穴住居跡が6棟と掘立柱建物跡が1棟、9区で竪穴住居跡が8棟と掘立柱建物跡が1棟以上、溝が1条検出された。竪穴住居跡はいずれも1辺3～6mの方形で、ほとんどのものが作り付けのカマドを持つ。特に5区のSB05は残りがよく、カマドの壁の一部が残存し、据えられていた土師器の甕がつぶれた状態でみつかった。住居跡は5区、9区ともに2、3ヶ所で重なりあってみつかったことから、すべてが同時に存在したわけではなく、何度か建て替えを行っていたことがわかった。使われていた時期は、出土した須恵器の杯、土師器の甕などから6世紀の終り頃と考えられる。溝からもほぼ同時期の須恵器の杯蓋、杯身、甕、甑、土師器の甕、土錘などが出土した。掘立柱建物跡は、いずれも2間×2間以上だが、建物が調査区外に伸びているため、正確な規模は不明である。出土した遺物も少なく、詳しい時期はわかっていない。



9区 掘立柱建物跡(東から)



9区 竪穴住居跡(東から)

## 奈良時代

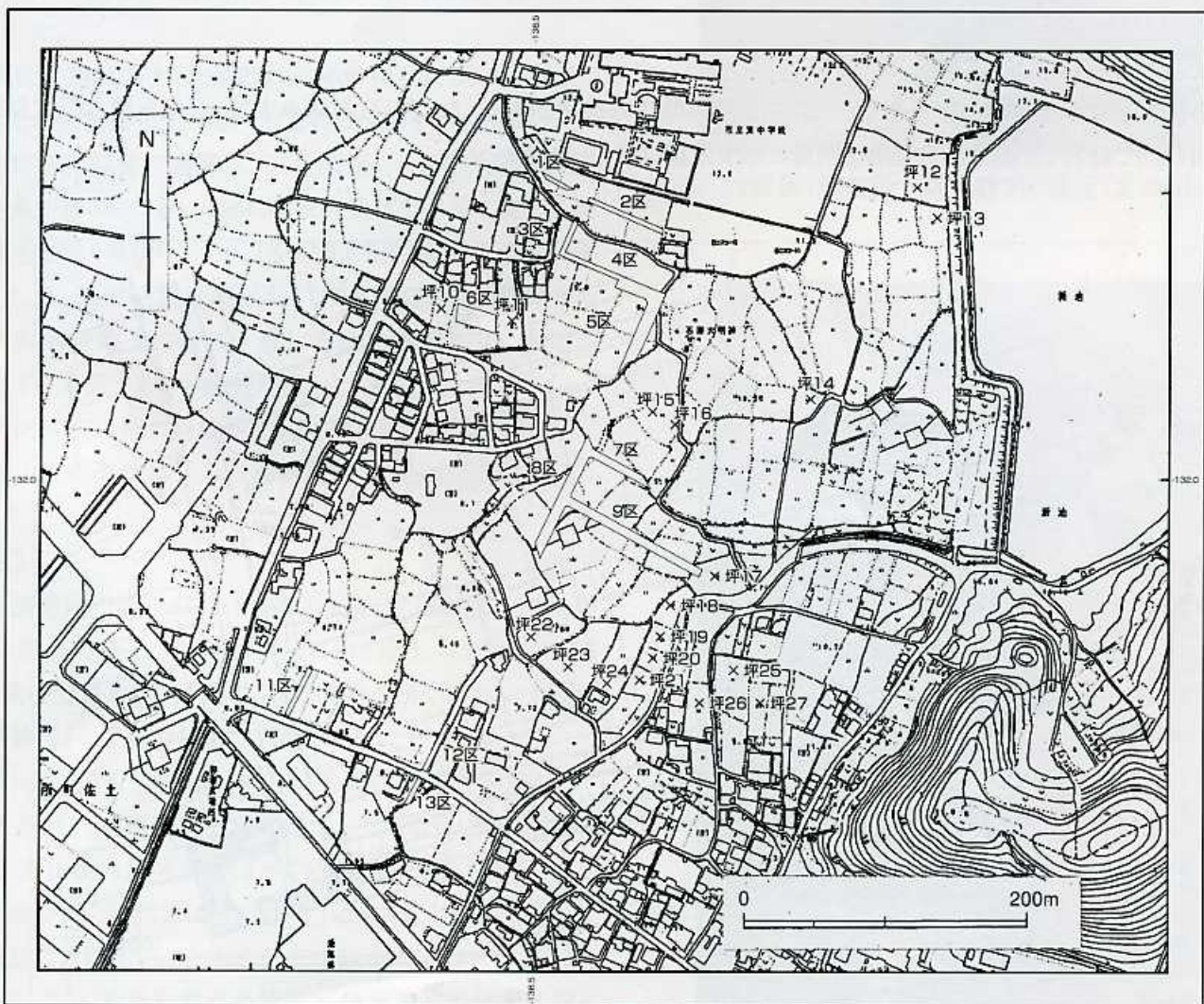
4区～9区で方形掘方の掘立柱建物跡、土坑、溝が検出された。特に9区は建物跡が集中して見つかった。この付近は北東から伸びる舌状台地の先端部にあたり、平成5年に鉄塔建設に伴う発掘調査を行った際も、掘方が60cm×100cmの掘立柱跡が確認されている。今回見つかった柱跡は掘方の大きさが1辺30～100cmあり、柱は径10～20cmの丸材が使われていた。建物の規模は最大のもので3間×5間で、庇の付いたものもある。建物群はその主軸の方角の違いと柱穴の重なり具合から何段階かの時期差があることがわかった。しかし、柱穴から出土した遺物が少なく正確な時期は限定しがたい。今回の調査によって、建物跡は9区付近の舌状台地先端部を中心とし、径約250mの範囲に存在することが確認された。しかし調査を行った範囲が狭く、遺跡の性格などに関しては今後の課題としたい。

その他、溝や土坑からは8世紀前後の須恵器の杯、蓋、稜椀、皿、壺、甕、土師器の杯、皿などが出土している。

## 平安時代中頃～鎌倉時代

1区～9区で多数のピット、溝が検出された。なかでも6区の溝は、10世紀の土師器の椀や皿が大量に出土した。また、7区と9区では平安時代末の墓が1基ずつみつまっている。このうち7区のもは集石墓で、散乱する川原石に混じって白磁の合子や土師器の皿などが出土した。9区の土坑墓からは、土師器の皿と人骨がみつまっている。

その他、6区～8区では掘立柱建物跡が検出された。ともに3間×2間以上だが、建物が調査範囲外にわたっており、正確な規模は不明である。



別所第2地点調査区位置図(S=1:5000)

## 4. 特別史跡姫路城跡

お城本町地区市街地再開発事業

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 7,964㎡ (調査延べ面積)
3. 調査期間 平成9年4月24日～平成10年8月31日
4. 担当者 多田・森

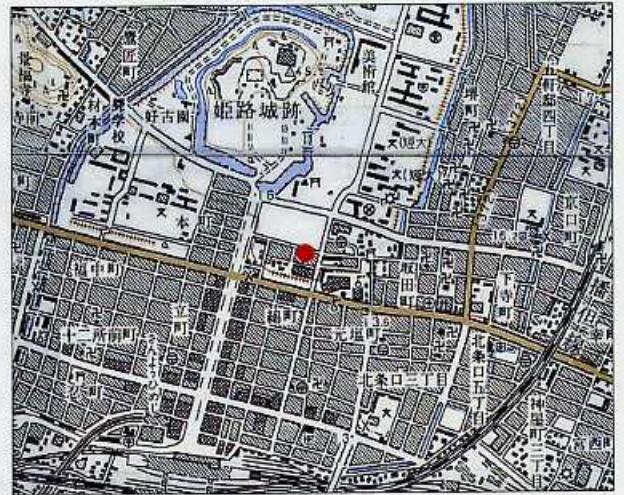
特別史跡姫路城跡D地区(通称:お城本町地区)の再開発事業に先行して、事業地内の発掘調査を平成8(1996)年度から実施している。

調査箇所は、姫路城中曲輪南部の武家屋敷地に位置する。江戸時代後期の絵図「姫路侍屋敷図」によれば、調査箇所の北東隅の一画には姫路藩校「好古堂」が一時期置かれていた。平成8年度の遺構確認調査で、「好古堂」のあった敷地とその南側の武家屋敷地とを隔てる、石組みの屋敷割り遺構がみつかった。

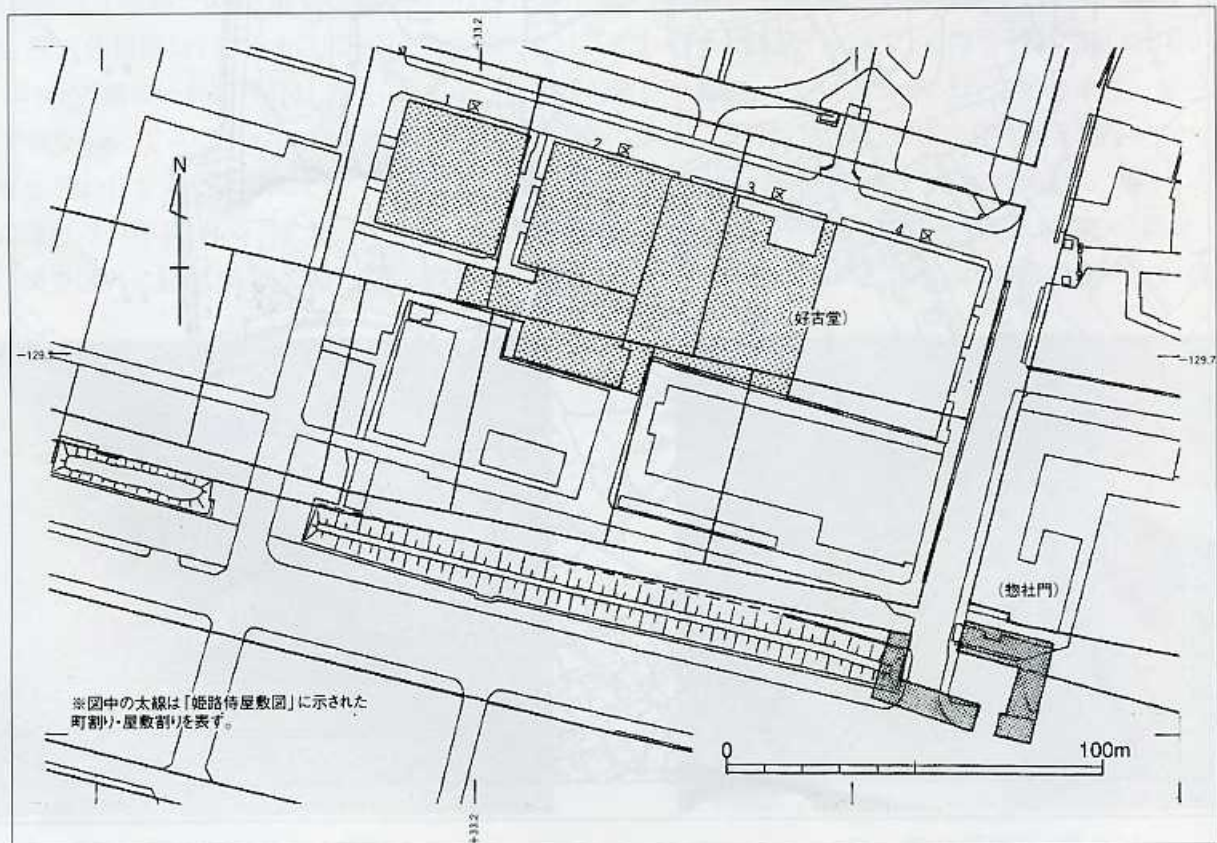
事業地は南北方向の通路によって4ブロックに分かれている。これを西から順に調査区1区～4区と呼び、平成9年度の調査では1区～3区を対象とした。

### 〔1区〕

第1調査面(現地表下40～60cm)では、主に江戸時代の遺構を検出した。井戸、石組み土坑、石組み溝、ゴミ穴などがみられるが、礎石など屋敷内の建物を明確に示す遺構は認められなかった。



調査地の位置図(「姫路南部」)



調査区配置図(S=1:2000)

調査区全体の遺構配置をみると、中央部付近にはゴミ穴などの数が少ない。この個所に屋敷建物が建っていたものと推定されよう。一方、屋敷の裏手に相当する南部には、ゴミ穴が集中している。また、北西部では井戸、貯蔵施設と思われる石組み土坑など、水周り関係の遺構がみられる。

第2調査面は、現地表下75～100cmで認められる黄褐色土上面である。調査区西部で、ほぼ真南北方向に走る溝を検出した。この溝は調査区の北西隅付近で東に折れた後、ゆるやかに北に曲がっていく。奈良～平安時代の遺物が少量出土しており、播磨国府関係の区画溝である可能性も考慮されよう。

### 〔2区〕

北部の第1調査面では、遺構の様相は1区と類似する。屋敷建物は調査区の北東部に位置したものと考えられる。また、第2調査面では、奈良時代の溝状遺構、16世紀中～後期の「初期城下町」関連の遺構と思われる東西溝などを検出した。

調査区南部の大部分では、近年の攪乱が深い位置まで及んでおり、黄褐色土上面ではじめて遺構を検出できた。

江戸時代以後の遺構としては、東西に延びる大形の溝状落込みが認められる。内部には植物遺体を大量に含む灰色粘質土が厚く堆積しており、18～19世紀の陶磁器片が少量出土した。検出位置は、3区および4区で確認した屋敷割り遺構の延長線上にほぼ一致しており、屋敷割りに密接に関連する遺構である可能性が高い。

江戸時代以前の遺構としては、奈良時代の土坑がある。また、上記の溝状落込みの南側肩部で、土錘がまとまって出土した。

### 〔3区〕

本調査区の北東部は、前述の「好古堂」敷地に含まれている。調査の結果、前年度の4区に引き続き、「好古堂」敷地と南側の屋敷地とを区画する屋敷割り遺構を検出し、『姫路侍屋敷図』の正確さを改めて確かめることができた。

さらに、「好古堂」敷地内では、大形のゴミ穴を検出した。19世紀代の陶磁器が大量に出土しているが、とくに、姫路藩窯・東山焼の製品がまとまっていることが注目される。東山焼が焼かれた時代には、「好古堂」はすでに移転しており、この敷地には細工所などの公的な施設が置かれていたもようである。こうした調査地点の特質と、藩窯製品の出土状況との相関性にも目を向けるべきであろう。



1区第1調査面 石組み土坑(南から)



1区第1調査面 井戸断割り状況(北から)



3区第1調査面 屋敷割り遺構(東から)

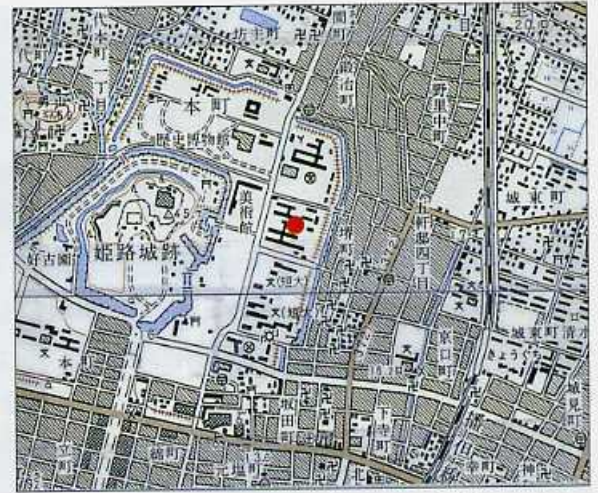
## 5. 特別史跡姫路城跡

国立姫路病院更新整備事業 (第5次調査)

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 131.53㎡
3. 調査期間 平成9年6月9日～平成9年6月21日
4. 担当者 山本

第5次調査区は、平成7年度の第2-1次調査区のすぐ西側に位置し、酒井時代の城下町絵図(18世紀後半頃)によれば、『渡辺運平』の武家屋敷に該当するもようである。

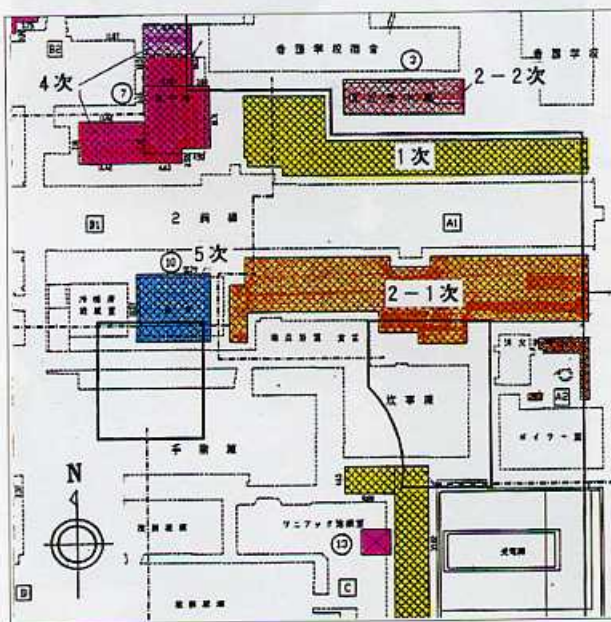
調査の結果、西～南端部の幅1.5mほどが旧病棟建物基礎などですでに攪乱を受けていたが、現地表下約70cm位で江戸時代以降の各種遺構を検出した。池状遺構1基、土坑5基、瓦囲遺構1基、瓦列遺構1条、ピット2基などがある。なかでも、調査区北東から南西にやや蛇行する形で検出された池状遺構は、幅約4～5m、深さ70～80cmの規模で、両岸に1～4段分の護岸石積みを備えていた。また、池の一部を川原石で堰状に埋め立てた二次的な改修の跡も検出された。この池は、出土した弥七コンロなどの遺物からみて、幕末頃まで機能していたことがわかる。このように今回の調査区は庭園の一画と推定され、東側の第2-1次調査区で検出済の水琴窟や凝った造りの石組み溝など一連の遺構と考えられる。



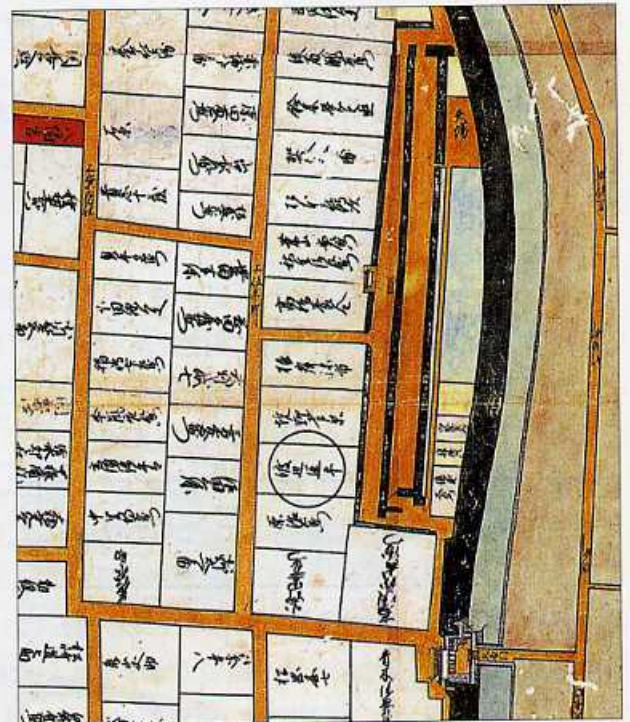
調査地の位置図(「姫路北側」)



池状遺構(南から 中央は堰か)



国立姫路病院調査区位置図



酒井氏時代城下町絵図と調査区

## 6. 特別史跡姫路城跡 三国堀

### 南石垣修理工事に伴う調査

1. 所在地 姫路市本町68
2. 調査面積 160㎡
3. 調査期間 平成9年7月27日～平成9年8月25日
4. 担当者 山本

三国堀南石垣解体工事に先駆けて、石垣上面の発掘調査を実施した。調査区は石垣に沿って幅4m、東西40mにわたる。調査箇所は、各種城絵図を見る限りでは、「菱ノ門」から「るノ門」へ至る通路の表記があるくらいで、何らかの建造物などの存在は予測されなかった。調査の結果、西端部から石垣面に開口する形で、比較的新しい時期の暗渠の残骸が検出された。位置的に「菱ノ門」からの雨落溝と推定される。調査区中央付近では、長さ4～5mにわたって石垣が陥没した箇所があり、その裏手の築成土に著しい土層の攪乱が認められた。これは石垣解体工事の進展とともに、二次的、かつ雑な後世の修理の跡であることが判明した。調査区東部では、昭和大修理時などのゴミ廃棄坑が密集しており、遺構は検出されなかった。

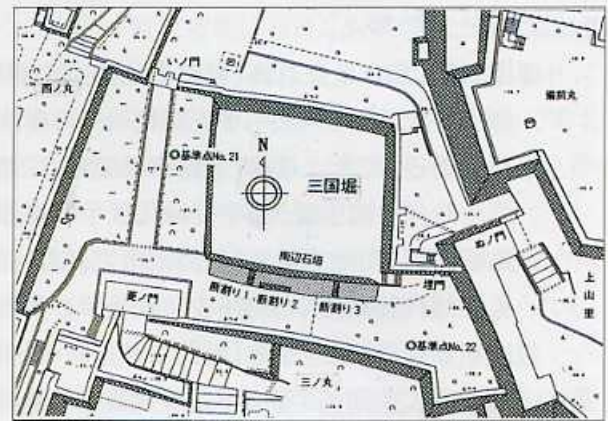
発掘調査に引き続いて実施された石垣解体工事(今回は推定高7～9mのうち、現地表下4～5mラインまで)では、石垣面および石垣裏築成土の観察の結果、下記の事実が明らかとなった。

- ① 石垣裏築成土は、基本的に粗い砂岩礫層(透水層)とよく締まった黄色土層(不透水層)との互層からなり、一見池の堤防の様相を呈する。
- ② 現地表下約2m付近で、池田氏時代の生活面と1条の石組み溝が検出され、石垣面にも断続的ではあるがほぼ同レベルで天端ライン(第1次)が走る。
- ③ 現地表下30～60cmに、第1次本多氏時代と推定される整地面が観察され、石垣面にも明瞭な天端ライン(第2次)が走る。
- ④ 現地表近くの石垣に、沈下に伴う天端石の積み増しが、さらに2回ほど行われている。

以上のとおり、今回の修理工事で三国堀の実態が一部判明したが、三国堀石垣の始築時期(羽柴秀吉時代か)の解明は今後の課題として残された。



調査地の位置(姫路北部)



三国堀南石垣調査区位置図



三国堀南石垣東半部解体中(北西から)



池田氏時代の下層石組み溝(南から)

## 7. 姫路駅周辺第3地点遺跡 (第2次調査)

1. 所在地 姫路市市之郷町
2. 調査面積 5,230㎡
3. 調査期間 平成9年4月1日～平成10年3月15日
4. 担当者 秋枝

姫路駅周辺で土地区画整理事業が施行されることとなった。事業予定地内に奈良時代前期創建と推察される市之郷廃寺(姫路市市之郷町)があることから、平成5年度から平成8年度にかけて遺跡確認調査を実施した。発掘調査の結果、事業予定地内で4ヶ所の遺跡を確認した。遺跡の概要は以下のとおりである。

姫路駅周辺第1地点遺跡〔姫路市北条:朝日橋以東用水路3号まで〕

弥生時代前期後半から平安時代後半の集落跡

姫路駅周辺第2地点遺跡〔姫路市神屋町:JR播但線路沿い〕

弥生時代中期中頃から平安時代後半の集落跡、近代(戦災遺跡)

姫路駅周辺第3地点遺跡〔姫路市市之郷町:12-2号街路以東市川西岸まで〕

弥生時代前期後半から平安時代後半の集落跡、奈良時代(寺院跡=市之郷廃寺)

姫路駅周辺第4地点遺跡〔姫路市駅前町・朝日町:朝日橋以西姫路駅東ビルまで〕

弥生時代前期後半から平安時代後半の集落跡、江戸時代(姫路城城下町)、近代(姫路駅駅舎)

事業予定地内で確認した4ヶ所の遺跡の取り扱いは、区画整理道路部分は姫路市教育委員会が、高架橋部分は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、平成6年度から発掘調査を実施することとなった。

平成9年度は高架橋に平行して設けられる道路部分で、第3地点遺跡の発掘調査を行った。総延長が東西約650mにおよび、調査で第3地点遺跡の東端と西端を把握することができた。調査区は広範囲のために大日線を挟んで東部と西部に分けて発掘調査を実施することとなった。以下、調査概要について記す。

### [西部調査区]

南北に走る大日線(幅員24m)の西部から西部調査区東端にかけて幅約11m・深さ1~2mのほぼ南北方向に走る河道を確認した。下層では多量の弥生時代中期から後期の土器が、上層では奈良時代前期の須恵器・土師器が出土した。



西部調査区 大型掘立柱建物跡(西から)



西部調査区 河道西肩出土打製石包丁・板状石核



調査地の位置図(「姫路南部」)



これらの資料はいずれも磨滅しておらず完形品に復元できる資料が多く、近辺の微高地から投げ込まれたり、流入したものであろう。

西部調査区では弥生時代中頃から古墳時代初頭の溝・竪穴住居跡・土坑・土壙墓・素掘りの井戸・掘立柱建物跡などの遺構が確認された。とくに注目すべき遺構は、弥生時代中期後半の東西棟の大型掘立柱建物跡である。規模は梁間は2間(5.1m)で、桁間は3間(8.2m)以上で、棟持ち柱を備えている。柱の大きさは30~45cmである。また、河道西肩に打製石包丁6枚と大型板状石核1枚が置かれ、近接して畿内産の弥生時代中期後半の雲母土器の壺が出土した。さらに、舟形土坑内で火を炊き、その後に大型甕・壺・横瓶・高杯・杯などの奈良時代前期の須恵器を破碎して埋納した遺構も注目され、破碎された水晶や土玉・土馬なども出土し祭祀に関係する遺構であろう。

#### [東部調査区]

調査区西部で奈良時代前期の市之郷廃寺に関係する遺構が確認され、中央部以東では古墳時代後期の竪穴住居跡・溝・土坑を検出し、住居跡内からまとめて軟質の韓式土器が出土するなど注目される資料が得られた。

大日線東端から東へ約80mの地点で幅1.8m、深さ60~80cmの南北方向に走る溝を確認し、溝内から多量の布目瓦が出土した。また、溝の東端から東西に幅約2mの範囲で、溝に沿うようにして南北方向に布目瓦が多数出土した。出土した瓦の中には市之郷廃寺の創建瓦と推察される軒瓦や鴟尾も含まれていた。これらの瓦は築地の落下瓦と思われ、この場所に市之郷廃寺の西端が想定される。さらに、この溝から東へ約120mの地点でも、同様に幅が2.2~2.8mで南北方向に走る落下瓦の一群を確認した。この瓦群の東端で幅約1mの南北方向に走る溝を確認し、溝内から布目瓦・須恵器・土師器などが出土した。この溝以東では奈良時代の遺構はあまり確認されず、近辺に東端が想定される。

東および西の溝で区画された東西約120mの中で掘立柱建物跡が12棟分確認された。建物の方位はほぼ真北方向をとる。柱穴の掘方から奈良時代の須恵器・土師器等の細片が出土していることから、寺院に伴う建物跡と考えられる。建物跡以外に溝・土坑・瓦溜り・素掘りの井戸などの遺構が確認された。

以上が本年度の調査概要である。第3地点遺跡の調査で市之郷廃寺に関係する遺構・遺物が確認されたことは重要な成果といえよう。多量に出土した瓦は、あまり知られていなかった奈良時代前期の古瓦を研究するうえで重要な資料で、とくに鴟尾が多数出土したことは注目される。また、掘立柱建物跡の方位がほぼ真北の方向をとることも分かり、廃寺の東端と西端の一部を確認できたことも重要な成果である。

さらに、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡の遺構も、東西に約650mに分布することも分かった。戦前に今里幾次氏が研究されたこの遺跡は、今回の調査で姫路平野を代表する大規模な集落跡であることも判明した。今後、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の高架橋部分の調査資料と照合しながら、第3地点遺跡の詳細な分析が必要となる。



東部調査区 掘立柱建物跡(北から)



東部調査区 東部築地基礎と落下瓦(北から)

## 8. (仮称)

### 垣内・津市場土地区画整理事業地内遺跡

(第1次調査)

1. 所在地 姫路市網干区垣内南町
2. 調査面積 1,100㎡  
(全面調査780㎡・試掘トレンチ320㎡)
3. 調査期間 平成9年12月24日～平成10年2月28日
4. 担当者 秋枝

姫路市網干区垣内・津市場地区で土地区画整理事業が計画された。平成7年度に国庫補助を得て遺跡確認調査を実施した。垣内南町で土坑・溝・備前焼・石甕埋納遺構(甕倉)を確認し、新たな遺跡の存在が明らかになった。

平成9年度は平成7年度の調査成果に基づき、遺跡の範囲が不明な東部はトレンチで再度遺跡確認調査を、西部は土地区画整理道路部分の発掘調査を実施することとなった。

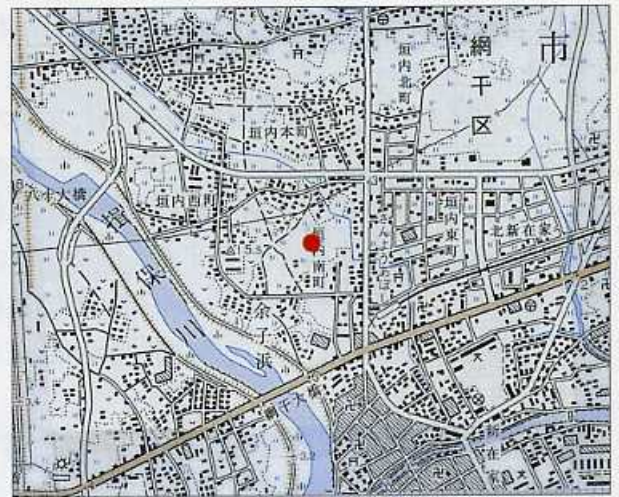
#### [東部調査区]

トレンチを4本(幅2m・総延長160m)設定して遺構確認に努めた。基本的な土層は耕作土(20cm)・黄色土(15~20cm)をへて黄褐色土となる。第4トレンチでは遺構は一切確認されなかった。しかし、第1から第3トレンチでは幅30cmで南北に走る小溝や柱穴などの遺構を黄褐色土上面で確認し、遺跡の範囲を確定することができた。

#### [西部調査区]

基本的な土層は東部調査区と同様で、遺構は黄褐色土上面で確認した。第1区では中央部から東部にかけて東西方向に走る柵状遺構を2条検出した。柱の大きさは径10~15cmで、柱間は一定せず、ばらつきがある。遺構の時期は柱穴の掘方から出土した土師器・備前焼から、後述する堀と同時期につくられた可能性が高い。第1区西端から第2区にかけて幅4m・深さ80cmの堀を南北方向に約50m分確認した。堀上面に多量の石が捨てられ、五輪塔の水輪・地輪・火輪をはじめとする石製遺品や、15世紀中頃から16世紀初頭の備前焼・土師器・中国製の染付・白磁などが出土した。下層の泥土から木製品・漆器碗・木片などが出土した。この堀から東方約40mの第3区でも南北方向に走る幅4mの堀を60m分確認し、堀内から15世紀中頃の土師器皿・埴、備前焼などが出土した。

以上が本年度の調査概要である。堀で区画された敷地内を南北に分割する柵状遺構を検出したことは、大きな成果といえよう。今後、遺物の詳細な整理を通して遺跡の性格を解明することが必要となった。



調査地の位置図(「網干」)



第1区柵状遺構および第2区堀検出状況(西から)



第3区 堀検出状況(南から)

## 9. (仮称)

### 谷内地区圃場整備事業地内遺跡

(第2次調査)

1. 所在地 姫路市飾東町北野・大釜・清住
2. 調査面積 1,106㎡(試掘坪239ヶ所)
3. 調査期間 平成10年1月10日～平成10年2月28日
4. 担当者 秋枝

姫路市飾東町谷内地区において、県営圃場整備事業が実施されることとなった。平成8年度は小原・小原新地区で発掘調査を実施した。調査の結果、磨滅の著しい土器が出土したが、遺構を確認することはできなかった。

平成9年度は北野・大釜・清住地区で事業予定地内46haについて遺跡確認調査を実施した。

北野地区では、現集落の南部で平安時代後半の溝・柱穴を確認した。遺跡は微高地の南端に該当する。分布調査で現集落を中心に遺物の散布が認められたことから、今回の成果は遺跡の存在を裏付けるものであろう。兵庫県教育委員会と遺跡の取扱いについて協議した。協議の結果、新たに坪を設定して溝の東西方向への延びと、遺跡の範囲を把握した後に、盛土保存することで兵庫県姫路土地改良事務所と合意した。

大釜・清住地区で磨滅の著しい土器細片が出土したが、遺跡を確認することはできなかった。



調査地の位置図(「笠原」)

## 10. 実法寺廃寺 (第1次調査)

1. 所在地 姫路市実法寺
2. 調査面積 156㎡
3. 調査期間 平成9年12月9日～平成9年12月20日
4. 担当者 秋枝

実法寺廃寺は戦前から著名な遺跡で、古瓦が研究者によって採集され奈良時代創建の寺院として知られていた。

このたび、廃寺跡想定地の西端の水田で宅地開発が計画された。調査区東南角に高さ80cm・径約5mの盛土があり、

この盛土は寺院の基壇の一部と考えられていた。調査は水田の中央部に南北に幅4m・全長34mのトレンチを設定して実施した。さらに、盛土部については、断割り調査を実施し盛土の時期等を把握することとなった。

トレンチ調査区の土層は耕作土(20cm)・床土(10～15cm)をへて黄褐色土となる。ただ、床土の下に薄く暗褐色の遺物包含層が堆積している部分もある。遺構は黄褐色土を掘り込んでつくられ、調査区全域で平安時代後半の柱穴を確認した。盛土部では拳大の円礫集積層(10～15cm)・耕作土(10cm)・灰褐色土(30cm)をへて、砂礫層となる。灰褐色土内から磨滅の著しい平安時代後半の土器細片が出土した。円礫集積層から縄文時代から近代の遺物が多数出土した。とくに、布目瓦が多数出土したことは注目されよう。遺物は円礫の中に混在して出土し、周辺部から採集したものを投げ込んだような状況で、この盛土は寺院の基壇の一部とは考えられない。

トレンチ調査区の土層は耕作土(20cm)・床土(10～15cm)をへて黄褐色土となる。ただ、床土の下に薄く暗褐色の遺物包含層が堆積している部分もある。遺構は黄褐色土を掘り込んでつくられ、調査区全域で平安時代後半の柱穴を確認した。盛土部では拳大の円礫集積層(10～15cm)・耕作土(10cm)・灰褐色土(30cm)をへて、砂礫層となる。灰褐色土内から磨滅の著しい平安時代後半の土器細片が出土した。円礫集積層から縄文時代から近代の遺物が多数出土した。とくに、布目瓦が多数出土したことは注目されよう。遺物は円礫の中に混在して出土し、周辺部から採集したものを投げ込んだような状況で、この盛土は寺院の基壇の一部とは考えられない。

調査で寺院跡に関係する遺構を確認することはできなかった。しかし、多数出土した奈良時代の布目瓦や、土師器・須恵器、円面硯・風字硯などの陶硯類は近辺に寺院跡の存在を予想するに十分な資料といえる。



調査地の位置図(「姫路北部」)

# **TSUBOHORI**

平成9年度(1997)  
姫路市埋蔵文化財調査略報

平成11年(1999年)3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課  
兵庫県姫路市安田四丁目1番地  
印刷 株式会社デイリー印刷  
兵庫県姫路市飾東町佐良和15番地